



本多作左衛門肖像 (個人蔵、撮影:堤 勝雄)

“一筆啓上火の用心 お仙泣かすな馬肥やせ”という短く要領を得た手紙文で有名な本多作左衛門重次は、戦国時代末期から江戸時代初期にかけて、松平清康・広忠・徳川家康の三代に仕え数々の手柄をたて、徳川幕府の礎を築くのに貢献した人です。晩年は、蟄居の身となり下総国相馬郡井野の地(現在の取手市)に三千石を領し、この地で生涯を終えた、取手ゆかりの人物でもあります。

作左衛門は、三河時代に高力清長・天野康景らとともに三河三奉行に任せられて、「仏高力、鬼作左、どちへんなしの天野三兵」と称せられていたように、損得を度外視して自己の信念を貫く姿勢と剛直な性格のため、「鬼作左」の異名をとった人でありました。しかし、その反面、心やさしい人でもありました。右記の手紙は作左衛門が戦場から家族にあてた手紙ですが、生死を争う極限状況のなかでも家族を思う気持ちを忘れないというやさしさが表れております。

「頑固者賞」は、この取手市にゆかりのある武将・本多作左衛門重次にちなんで設けられたものです。「徳川」という組織のなかで自らの役割を理解し、損得を度外視して自己の信念を貫く姿勢と剛直な性格の本多重次を「頑固者」として据えて、自分の信条を貫いて生きることの大切さや、心やさしくしなやかに頑固に生きる大切さをテーマにしたエッセイを、全国から募集するものです。

「頑固者賞」は、単なるエッセイの募集ではありません。現代にも通じる作左衛門の精神を学び、この機会に応募者が、自分自身を見つめ直すことよって自ら

の存在が社会のなかや家庭のなかでどのように位置付けられるかを考えていただくことも目的としています。例えば、世のお父さんたちに子供たちからも妻からも信頼される真の“日本の親父の姿・心・自信”をもう一度取り戻していただきたいと願うものであります。

今年度は第一目として「家族」をテーマにエッセイを募集しますが、次年度以降も「仕事」、「学校」、「仲間」などをテーマに募集していく予定です。「文化によるまちづくり推進」の一環として、取手市の21世紀の人づくり・地域づくりを目的とした生涯学習運動として今後の展開を図っていくとともに、取手市から日本全国に発信していくものにと考えております。

本多作左衛門重次

(ほんださくざえもんしげつぐ)

1529(享禄2)年、三河国に生まれ、松平清康・広忠・徳川家康の三代に仕えた。1572(元龜3)年三方ヶ原の合戦では、退却する家康軍の一番後ろで武田軍の追撃を阻止するなどのぶ勲をあげ、また、1565(永禄8)年より三河奉行として行政手腕も発揮した。しかし、家康上洛の際に人質として三河に来た大政所(豊臣秀吉の母)の扱いをめぐる、秀吉の怒りに触れ、1590(天正18)年家康の関東入府後は、下総国相馬郡井野に閉居された。そして、1596(慶長元)年、この地で没した。彼が1575(天正3)年長篠の合戦時に家族に送ったとされる、「一筆啓上火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」という簡素な文面は、日本一短い手紙として有名である。

